

落涙のとき

渋谷 咲

客が疎らな劇場はスクリーンに反射した光に照らされて薄ぼんやりとしている。スタッフロールに合わせて流れるクラシックの音楽は誰の何という曲なのかは分からない。それでもその曲は、まるで栄一郎が物語に馳せる思いに寄り添うように感動を助長した。

鼻をすする音が頭に響いた。鼻腔の奥がツンと痛み、じわりと涙が込み上げてくる。鼻の下を擦りながら、自分はどうしてこんなにも涙脆く出来ているのだろうかと考えた。

隣の座席に座っている連れの瞳は、来た時と同じような、何を考えているのかよく分からない表情のままスクリーンを眺めている。彼女の反応はいつも通りに希薄で、使用されることのなかったハンカチは膝の上に揃えられた両手の下敷きになっていた。

栄一郎がもう一度鼻をすすった時、それまで目立って身動きひとつしなかった瞳がハンカチを鞆にしまって音もなく立ち上がった。つられるように見上げると、彼女は栄一郎を見下ろして行くよ、と口だけを動かした。映画でしか聴く機会のないクラシックに聴き入っていた栄一郎は、僅かに動き出すのが遅れる。だが、瞳はそんなことには目もくれず、踵を返すと座席の間の階段を下って行ってしまった。トランペットのファンファーレに背中を押され、栄一郎は弾かれたようにその後を追う。

スクリーンから意識が剥がれると、途端に頭の芯が冷めていく。さっきまで浸っていた感動の余韻は嘔み砕かれて飲み下されて、腹の底まで沈み込んで、感覚的な理解とは掛け離れてしまった。そうなるかと、考えれば考える程何に感動していたのかが分らなくなつた。

映画館を出ると、瞳はレールの上を走る列車のように迷いのない足取りで通りを左に折れた。栄一郎はつかつかつと靴の踵を鳴らしながら歩く彼女の後ろを少しだけ早歩きをして付いていく。瞳は歩くのが早くて、どうやらそれは踵の高い靴でも同じことのようなだった。人を避ける瞳に合わせて、栄一郎も左に右に蛇行する。瞳の速度に合わせて横に並ぶより、彼女の背中を見て歩く方が効率的なのだ。栄一郎はこの法則を四本目の映画を瞳と見に行った時に発見して以来、隣に並んで歩いたことがない。

映画館の近くにある行き付けの喫茶店は、日曜日の昼時とあって混雑していた。瞳は混みあった店内を進んで窓際の席に座ると、鞆を抱えて狭い座席の間でもたもたとしている栄一郎を見遣り、呆れたような顔をした。

「君ね、映画一本見るのにそんな重たそうな荷物があるの？」

「いえ、午後から大学に行くんです」

窓際に辿り着いた栄一郎は鞆を下して瞳の向かいに座った。瞳はふうんと生返事をしながら頬杖をつく。

「秋の学園祭に向けて映画を撮ることになって。今日は打ち合わせなんですよ」

栄一郎が声を弾ませると、瞳はぱらぱらと捲っていたメニューから視線を外し、興味深そうに低いトーンでへえ、と口元を緩めた。

「脚本は僕が書くんですよ」

「あら。監督は誰がやるの？」

「監督は新井さんです」

「新井が？ あいつ、四年なのにそんな暇があるのかしら」

瞳が皮肉めいた口調でそう笑った時、従業員が注文を取りに来た。瞳はまるでそれを待ち構えていたかのようにカタカナの多い料理名をすらすらと暗唱するように言った。栄一郎は慌ててメニューを開き、目に付いたものを適当に注文した。

瞳は栄一郎と入れ違いに卒業していった元映画研究部員である。彼女とは件の新井という瞳の後輩で栄一郎の先輩にあたる人の紹介で知り合った。月に数回映画を見に行くという関係は今年で二年目になる。

初めて合った時、つい最近まで高校生だった栄一郎に対して彼女は大卒の社会人だった。年上の人とあまり親交のない栄一郎は、落ち着いた大人の雰囲気のある瞳に取っ付きにくさを感じていたが、映画が好きという共通点のおかげで打ち解けるのに時間はかからなかった。瞳は栄一郎の印象通りに落ち着いてこそいたが、なかなか饒舌だった。伸びやかな声で発せられるのは知的な話題がほとんどだったが、冗談も通じて茶目っ気もある。年相応の社会人といった感じだった。その印象は今も変わらず、瞳には常に大人の余裕というものがある。時には少しだけわがままで、栄一郎は彼女について退屈することはきつとないのだろうといつも思う。

料理が運ばれてくると、栄一郎は一気に口数が減る。栄一郎は食えることと話すことを同時にすることが出来ない。食べる割合と喋る割合のバランスが上手く取れないのだ。だから、食事中は瞳が一方的に講釈めいた小難しい話をしてることがほとんどだった。栄一郎は口いっぱいに頬張ったものをすっきりと飲み下してから、次に口にも入れるまでの僅かな時間にもそもそと言葉を返すだけだった。それでも瞳は栄一郎の拙い反論を丸め込むのが案外に楽しらしく、皿の上の料理を器用に片付けながら終始ご機嫌そうな口振りをしていた。

栄一郎が料理を粗方食べ終えた頃になって、今度は話すだけ話して満足したらしい瞳が黙々と料理を口に運ぶ。瞳と話す時は必要以上に相槌を打たない方が良い。彼女は話の腰を折られるのを嫌うのだ。これは、栄一郎が瞳と七本目の映画を見に行った時に発見した法則である。

「ところで瞳さん。今日はどうしてスタッフロールの途中で抜け出したんですか？」

瞳は栄一郎の問い掛けの意図を図り兼ねているようで、数回瞬きを繰り返した後に、行儀良く口の中のものを嚥下してから口を開いた。

「なんであって、お腹が空いてたのよ。深い意味なんてないわ」

「お腹が空いたって。スタッフロールが終わるまでが映画なんですよ？」

栄一郎が情けなく甲高い声を出すと、瞳は持ち上げかけたフォークを皿に下ろし、あのクラシック、好きじゃないわ、と小さな声で呟いた。どこか険を含んだその物言いに、栄一郎

は自分の肩が縮こまるのを感じた。瞳は映研時代にストーリーと音楽の相乗作用について研究していたのだ。その点に関しては彼女に口出しをすることは憚られる。栄一郎は瞳の様子を上目に窺った。

「面白く、なかったですか？」

萎縮した様子の栄一郎を憐れに思ったのか、瞳は尖らせていた薄い唇で緩い弧を描いた。「面白かったわよ。それなりにね」

栄一郎は瞳の口から直に聞くことでしか彼女の感想を知ることが出来ない。瞳は感情をあまり顔に出さないし、聞かれなければ自ら感想を述べるといふこともしないのだ。

「それで、感動しましたか？」

栄一郎がおおずとお尋ねると瞳はからかうような素振りで頬杖を突いた。

「さあ。それはどうかしら。少なくとも君よりは感動してないわね」

そういう君は、一体あれのどこにそんなに感動したのかしら。瞳は栄一郎の顔を小馬鹿にするようにフォークで指し示した。大方、泣き過ぎて目元が赤くなっているとでも言いたいのだろう。

「あの映画はネットでも凄く評判が良かったんですよ」

栄一郎の照れ隠しの反論に、瞳はそんなことを聞いてるんじゃないわ、と小さく笑った。

「世間の評価なんてどうでもいいのよ。君が何に感動したかを聞いているの」

それは。

栄一郎は答えに窮して俯いた。微かに湯気を散らすコーヒートの表面には輪郭のはっきりとしない自分が映り込んでいる。

——その質問は、困るのだ。

あの感動はもう飲み込んでしまった。自分の中には、既に考えること以外でそれを存在させることは出来ない。思考と乖離させることは不可能だった。

それはもう感動などではなかった。

「瞳さんは、どうして感動出来る映画を見たがるんですか？」

栄一郎は仕方なく論点をずらした。いや、仕方なくではない。然るべく、だ。元はと言えば、瞳が感動出来る映画を見たいと言いつつ出たことが発端なのだから。

「いつも感動出来るのがいつだって言いますけど、その」

今度は言葉に詰まった。反応が薄い、と言うのはこちらがそれを不満に感じていると思われ兼ねない。かといって、感動していないのでは、と聞くのも具合が悪いように思えた。

栄一郎の言わんとすることを察したのかそうじゃないのか、瞳はティーカップをソーサーの上に戻した。

「君といれば感動出来ると思ったのよ」

瞳はくりくりとよく動き回る視線を栄一郎に定めると、諭すようなで口を開いた。

「私、映画で感動して泣くことが夢なの」

瞳が聞かれもしないのに自分のことを語ったのは、それが初めてのことだった。

栄一郎が大学に着いたのは二時を少し回った頃だった。学生がたくさんいる校舎に比べ、サークル棟は時間帯のせいかあまり人氣がなかった。

学生の声の届かない棟内は喧騒と隔てられひっそりとしていて、歩を進めるたびに足音が無機質な壁によく響いた。廊下は日当たりが悪くて、窓も少なく薄暗かった。

サークル棟はキャンパスの隅に位置する三階建ての小さな建物だった。一、二階はスポーツ系のサークルが大部分を占めている。映画研究部の部室は階段を三階まで上って、右に曲がった突き当たりだった。

ノブを思い切り引くと、建て付けの悪い扉は耳障りな摩擦音を立てた。室内に一步踏み込むなり集まった視線に栄一郎は面喰って、そして自分が遅刻したのだと悟った。どうやら映画製作に向けての打ち合わせは既に始まっていたようだった。

「遅れてすみません」

栄一郎はへこへこ頭を下げた。集まっていた視線は闖入者が栄一郎だと分かった途端に散り散りになり、何事もなかったかのように仄かな緊張感が辺りに漂う。栄一郎は打ち合わせを進行する部長の声を掻き消さないように後ろ手にそつと扉を閉めた。室内をちらりと見渡すと、一番後ろの席で新井が小さく手を振っていた。

鞆を抱えて中腰になりながら壁沿いに移動し、新井の隣の椅子を引く。脚を組んで踏ん返り返っていた新井は鞆の中身を出す栄一郎に身を寄せ、声を潜めて口を開いた。

「橋本、遅かったな」

「ええ、まあちよつと」

新井は栄一郎が鞆から出した映画のチラシを見て、また映画か。お前も好きだな、と言って再び深く背凭れた。ホワイトボードの前では、部長が今度の活動計画についてを少し右上がりの字で書き連ねていた。

「それより、いいんですか。監督なのに話し合いに参加しなくて」

新井は別にいいよ、と顔の前でひらひらと手を振った。

「どうせ日取りの決定だけだし」

「ああ、そうなんですか」

通りで脚本担当の栄一郎が遅刻してきても文句の一つも無いわけである。

それにしてもここは話し合いの輪から離れ過ぎているような気がするのだが。栄一郎が小声でそう問うと、新井はいいんだよとがしがしと頭を掻いた。

「後ろから見えて分かることもあるんだよ」

部員の様子を観察している新井の横顔からは、監督という重任への決意と覚悟が見て取れた。

新井は気前の良い先輩だった。気配りも出来るし、周りの状況も把握出来る。映画に懸けるこだわりも人一倍に持っている。ただ、彼は発想が独創的で、それに付いて行けない部

員も多かった。だから四年生の新井にとって、引退前の今回の制作は、初めて最後の監督だった。

栄一郎は群れの中の一匹狼のような新井とは妙に波長が合った。脚本に抜擢されたのだから、信頼されているからだと自負している。だからこそ彼の監督する作品をなるべく良い出来にしたいと思うし、そのために出来得る限り尽力したいとも思う。そして何よりも、自分と着想の異なる新井がどんな映画を作るのかに興味があった。栄一郎は新井という人間に惹かれていた。

鞆から打ち合わせのために持参した雑誌やらビラやらを出し終えると、新井はその中のひとつを摘まみ出した。そして何かに気付いたような顔付きで机に広げられたそれらを見回した。

「もしかしてこれ、瞳先輩と一緒に見に行ったやつか？」

「そうですけど、よく分りましたね」

栄一郎は目を丸くした。持ってきたもののほとんどは自分で買った書籍だったが、それ以外は確かに瞳と見に行った映画のパンフレットやビラだった。新井は手に取ったパンフレットを栄一郎に押し付けると机の上を顎で示した。

「瞳先輩、その監督の映画をよく見てたんだよ」

「ああ、そういえば瞳さん、この人の作品は割と評価が良いんですよ」

瞳は映画の好き嫌いがはっきりとしている。彼女はそれを自ら表に出すことはないのだが、やはり好きな映画を見た後は機嫌が良さそうに見えるのだ。だから栄一郎は彼女の反応が良かった映画と同じ傾向や監督の作品を意識的に選ぶことが多かった。

「やっぱりこの監督が好きだったんですね」

だが新井は、それは違々と首を横に振った。

「好きなのは監督じゃなくて、そいつの選曲」

「選曲？」

栄一郎が鸚鵡返しに聞き返すと、新井は昔のことを思い出すような顔をして口を開いた。「そう、選曲。ストーリーとBGMが噛み合ってるんだとか何とか。まあ、そこは俺の分野じゃないからよく分らないけど。ほら、瞳先輩って音響が専門だっただろ？」

新井は詳しいことは分からないと白い歯を剥いて笑った。

栄一郎がそのことを聞いたのは新井からだった。やはり、栄一郎は瞳のことを彼女の口から直接聞いたことがほとんどないのだ。瞳のことは基本的には新井が彼女を紹介してくれた時に教えてくれたことしか知らないし、本人からも必要以上のことを聞くことはなかった。そもそも、栄一郎と瞳は互いのことを話すということをしないし、する必要があるような関係でもない。月に数回映画を一緒に見に行くということ以外に大した接点もないから、結局のところ同じ時期に大学に在籍していた新井の方が付き合いも長く瞳について詳しくて当たり前だった。

「新井さんは、瞳さんが感動出来る映画を見たがる理由を知っていますか？」

だから、新井なら瞳が映画に惹かれる理由を知っているかもしれないと、そう思った。仮に新井がそれを知らないとしても、彼がそのことについてどんな考えを持っているのかは興味深かった。

だが、彼の返答は栄一郎が予想していたものとは大きく違っていた。

「ええ？ 瞳先輩って、感動出来る映画が好きなのか？」

新井は意外そうに語尾を上げた。

「俺と一緒に行く時はそんなこと一言も言わなかったけどなあ」

「そう、なんですか？」

「どんな映画が見たいかなんて言われたこともないぞ」

新井は脚を組み換えて唸りながら首を傾げていたが、突然にああと何か思い出したような声を上げた。

「そういえば瞳先輩、感動して泣くような奴を紹介してくれないかって言ってたんだ。それで橋本を紹介したんだよ」

お前、すぐ泣くからな。新井はそう言って栄一郎の顔を見て口元を緩めた。

栄一郎は自分が瞳に紹介された経緯を初めて知った。その場に居合わせた成り行きだと思っていたのに、それが故意であったとは。それ以上に、瞳が感動する映画を見たがっていることを新井が知らなかったということにも驚いたが。てっきり彼もそのことを知っていると思っていたのだ。

何にせよ、瞳が栄一郎に感動出来る映画を求めているということは明らかだった。栄一郎はまさにそのために瞳に紹介され、それが役割だった。だが、栄一郎には何故彼女が人を紹介してもらってまでそれに固執しているのかは到底分りそうになかった。

「瞳さんはどうしてそこまでするんでしょう」

ぽつりとそう呟くと、新井は部員たちを眺めていた視線を首を回して栄一郎に寄越した。

「そんなの、好きだからに決まってんだろ」

新井はさも当然だと言わんばかりの表情でそう言い切った。

「いや。別に好きってわけでもなさそうっていうか、」

しかしよく考えてみると、瞳の映画の好みなど栄一郎は知らないのである。確かに感動出来る映画を見たいとは言っているが、それはその手の映画が好きだということとは同義にはならない。先程の口振りだと、新井も彼女の好みは知らないようだった。

そもそも彼女は、映画が好きなのだろうか。

唐突にそう思った。好きなんて、口先では何とでも言えることなのだ。目の前の部員たちだっただけだ。好きということと興味があるということだっただけで、同じことようでもまるで意味が違う。ただ、深く考えると自分の映画への感情まで曖昧なものになってしまっただけだ。から、栄一郎はそこまで考えて、考えることを止めた。止めた代わりに、隣にいる男はどうなのだろうと思った。

新井は軸がしっかりとっていた。確固とした自分を持っていて、それは決して揺らぐこと

はない。それに比べて、栄一郎の中の概念や意義は酷く曖昧模糊としている。いつでもふらふらとしていて、なかなか地に足が着かない。

不安定だと、栄一郎は新井にそう言った。

「いいんじゃないのか、それで」

新井は遠くを見るような目で話し合う部員を眺めている。その目は、まるで何かを見透かしているかのように澄み切って見えた。

「概念とか意義とか、難しいことはどうでもいいんだよ。そんなものなくても、俺たちはちやんと映画に夢中だろ？ 好きでやってるし、いつだって全力だ。なら、それでいいんじゃないか？」

「そういうもの——なんですかね」

ああ、やはり彼は自分の足で立っている。栄一郎は普段はすぐ近くにいる新井が物凄く遠くにいるように感じた。

「映画は見たいから見るものだろ。瞳先輩も、誰でもそうだって」

それよりもお前は今やるべきことがあるだろう、と新井はそう笑いながら栄一郎を肘で小突いた。

解散を告げる部長の号令を聞きながら、栄一郎は脚本の内容を決めなければならないなと思った。

瞳と会うのはちょうど一カ月振りだった。

栄一郎は講義とサークル活動に追われていたし、瞳は瞳で仕事を立て込んでいて忙しくしていたようだった。久し振りに会った瞳のワンピースを見て、栄一郎は季節はもうすっかり夏になったのだと改めて実感した。

上映は午後からだったから、栄一郎と瞳は早目の昼食を摂るためにいつもの喫茶店に入った。昼時前の中途半端な時間だから店内は空いていた。瞳は陽射しを避けるように日陰になった席に着いた。

「ねえ、今日はどんな映画なの？」

瞳は何やら難解な名前の料理をいつもよりゆっくりと片付けながら楽しげにそう言った。

「今日はこれですね」

栄一郎はプリントアウトした映画館の上映スケジュールを手渡した。

瞳は紙面にさっと目を通すと、案の定口角を上げた。

「あら、面白そうじゃない」

「瞳さん、その人の選曲が気に入ってるんですね」

栄一郎は、この日のために彼女好みの選曲をするという件の監督の作品を調べてきたのである。それを聞いた瞳は虚をつかれたというような顔をした。

「何で知ってるのよ、そんなこと」

「新井さんに教えてもらいました」

瞳は新井の名前を出すとせせら笑うような眼差しで栄一郎を見た。

「君は自分で考えるってことはしないのかしら？」

「してますよ。ちゃんと自分で考えてます」

むきになって思わず言葉が口を突いて出た。すると瞳はそれを待ち構えていたかのよう
に素早く栄一郎の鼻先を指差した。

「何？ 君は一体何を考えてるっていうの？」

それは。栄一郎は昼食を咀嚼しながら言葉を詰まらせた。

結局のところ、栄一郎は瞳が感動したい理由も映画を見る理由もまだ分かっていない。考
えているというよりは、模索していると言う方が合っているような気がした。

栄一郎は要領を得ない言葉でもごもごそう答えた。

「ふうん。君にしたら随分と哲学的なことを考えるようになったのね」

それを聞いた瞳は、つい先程まで浮かべていた笑みを引っ込めると手持ち無沙汰な様子
でアイステイーの氷をストローで掻き混ぜた。がちがちという水っぽい音は日陰の中
で一層に冷たく聴こえた。

瞳は興味を削がれたというような表情でコップの底を吸い上げた。自分の発言のどこが
拙かったのかが分らない。ただ、栄一郎が彼女の望んでいた返答をすることが出来なかつた
ことだけは確かだつた。

栄一郎は拙い言葉をその上から重ねることしか出来なかつた。最早自分が何を言いたい
のかは不明瞭になつていた。瞳に会うまで栄一郎は意義だの定理だの、そんな小難しいこと
は考えたことがなかつたのだ。

ただ好きだから。

それだけで、地に足が付いたのだ。

いやーそうじゃない。

足なんて、初めから付いていなくて良かったのだ。

栄一郎は瞳の皿の上から料理が消えていくのを見詰めながら、自分なりに考えた感動と
は何か、ということを書き並べようとしてぐたぐたと述べた。

「ーそれじゃあ、駄目よ」

瞳はそれを黙って聞いていたが、終わりの見えない話にとうとう痺れを切らしたのか、先
を遮るように突然にそう言い放つた。そして腕時計で時間を確認すると、意味が分らずにぼ
かんと口を開けた栄一郎に有無も言わず、伝表を手に立ち上がった。

「そろそろ行かないと間に合わないわよ」

ほら急いで。急かされた栄一郎は皿の上に残っていた料理を口に押し込んで無理矢理に
飲み込んだ。瞳が何に対して駄目だと言っていたのかを聞き返す暇もなく喫茶店を後にす
る。

かつかつとリズムカルに踵を鳴らす瞳の後を歩く。颯爽と歩く瞳は映画館までの道程で

口を開くことはなかった。その背中はずぐ目の前にあるのに、本当の彼女はそこではなく、どこか栄一郎の意識の及ばないような所に行ってしまったように感じて、栄一郎も自分から声を掛けることはしなかった。

劇場に入ったのは上映の五分前だった。瞳と見に行く映画は決まって公開が終了間近のもので、客席はほとんど空席のままだった。彼女は人混みはあまり得意ではないのだそうだ。席に着くと、瞳は鞆からハンカチを取り出して膝の上に置いた。今までは大して気にも留めていなかったが、そのどこか儀式めいてすら見える一連の動作は瞳なりの気持ちの切り替えなのだろうと思った。彼女は本気で映画で泣きたいと思っただけにここにいるのだ。

上映時間になると、照明が落ちて劇場は一気に暗くなった。スクリーンに映像が投射されるまでの僅かな間に、それまではつきりとしていた栄一郎と全ての境界線は解けてぐずぐずになって、感覚という感覚が空間と同調する。

栄一郎は現実の煩雑さを忘れて映画にだけ意識を集中することが出来るこの瞬間が好きだった。だが、今日だけは瞳の言葉が頭から離れてくれないようだった。自分が映画を見ている時に他のことを考えているなんて初めてのことだった。

それでも栄一郎は物語が終盤に差し掛かり、悲劇がハッピーエンドに転じるとぼろぼろと泣いた。頭の中は現実と目の前に広がる虚構とが緋い交ぜになっていた。そのせいで余計に自分は涙脆い質なのだと思った。

感動したいという瞳も、スクリーンの中の薄幸な主人公も、どちらも悲しいと思った。けれど、栄一郎にはそれを彼女に伝える術がなかった。

栄一郎の感動は、外に出た瞬間にもう感動でなくなってしまうのだ。栄一郎は鼻をすすりながら隣に座っている瞳へ首を向けた。彼女の膝の上では、今日も使われることがなかったハンカチが綺麗な状態のまま僅かに皺を寄せていた。それを見ると、やはり栄一郎は無性に悲しくなるのだった。

瞳はぼろぼろと泣く栄一郎を見て小さく静かな声で呟いた。

「悲しむことは、難しいわね」

瞳は寂しそうな顔をして自分の涙を拭うはずだったハンカチで栄一郎の涙をそっと拭いた。

劇場にはハッピーエンドに相応しい軽やかな行進曲が流れていた。

映画館を出ると瞳は通りを右に曲がって真っ直ぐに駅へ向かって歩き出した。栄一郎はその後ろを重い足取りで付いていく。瞳はバスで栄一郎は電車だったが、バス停は駅にあるから帰り道は必然的に一緒になるのだ。

何が変わるといふこともなかった。栄一郎は瞳を感動させることも、感動がどういふことなのかを彼女に伝える術を思い付くことも出来なかった。変わったことといったら、瞳のハンカチを初めて濡らしたのが彼女の涙ではなく自分の涙だったということだけだ。

「瞳さんは、どうして感動したいんですか」

結局栄一郎は最初の疑問に立ち返った。新井が何と言おうと、それが分らなければ先に進めない。

「前にも言ったじゃない。それが夢なのよ」

瞳は足を休めなかった。駅はもうすぐそこまで迫っていた。

「ならどうして映画なんですか？」

どうしてもそれが映画である必要性が見当たらなかった。そもそも栄一郎は、彼女が映画を好きなのかどうかも分からなくなってしまったのだ。

「じゃあ君はどうなの？」

ちよūdōバス停に着いて、瞳は初めて振り返った。表情からは何も汲み取ることが出来ない。

「君は何のために映画を見るの？」

「それは、僕が」

映画が好きだからと、そう言おうと思ったが続く言葉は喉の奥から出てくることはなかった。瞳は栄一郎をじっと見詰めている。栄一郎は彼女に全てを見透かされているような錯覚を覚えた。いや、実際にそうなのかもしれないなかった。

栄一郎は、自分が映画を好きなのかが分らなくなってしまった。足が、離れてしまったのだ。

それは瞳の内面を疑うよりもずっと鮮明な疑惑だった。そして彼女には栄一郎がそこに辿り着くことも容易に想像出来ていたのだ。少し考えればすぐに分かることだった。栄一郎は感動を思考と共存させることが出来ないのだから、好きだの嫌いだの、そんな概念的なものを確認とした定義もなしに自分の中に認可することなど出来るはずがなかったのだ。

そう気付いてしまえば、さっきの感動も今までと同じように腹の底まで沈み込んでしまった。あんなに流した涙も、頬に痕も残さずどこかに消えてしまっていた。

「だから駄目だって言ったのよ」

瞳の角膜にはまるでそれが乾き切っているかのように何も、目の前の栄一郎も映っていないかった。

「あなたの感動には初めから定義なんてないじゃない。それなのに無理に言葉にしようとしたりするから分からなくなるのよ」

そんなの、もう感動でも何でもじゃないじゃない。瞳の声は普段の饒舌に比べると随分と弱々しかった。

それならば。

栄一郎は考える。自分にとって感動が感覚的なもので意義がないのなら、何故瞳はそれを栄一郎に求めたのだろうか。

こんな、自分が何処に立っているのかも分らない男に――。

「瞳さんにとっての感動するとは何なんですか？」

栄一郎がそう聞くと瞳は少しの間沈黙して、分からないわと俯いた。

「だったらどうして泣きたいなんて言ったんです？」

「君が定義もないもので泣くからよ」

間髪を開けずにそう答えた彼女の口調は栄一郎を責め立てているようでもあったし、どこか寂しそうにも聞こえた。

「私は感覚だけで感動を理解するなんて出来なかったのよ。でも結局自分ではそれを言葉にすることも出来なかったわ」

風が瞳の服の裾や髪を靡かせた。栄一郎は彼女を見て、不安定だ、と思った。いつもは落ち着いている瞳がこれ程感情を表に出すのを見るのは初めてだった。

「やっぱり何も分かってないのね」

何が、と聞き返した口の中は酷く渴いていた。栄一郎は分かっているのではない。だが、確実にそれに近付いて、気が付き始めていた。

多分。いや、十中八九。

感動したのではないのだ。

彼女はそれが――。

「感動して泣きたいんじゃないのよ」

栄一郎が結論に至るよりも先に、瞳が震えた声でそう言った。

酷なことだった。自分で言わせるなんて。彼女にとって、それは認めがたい、許容しがたなことだろうに。

栄一郎は彼女の告白を止めるべきだった。脳裏で見え隠れする答えがそう言っている。

もう、良いのだ。

だから、止めなくては――。

栄一郎は口を開こうとした。だが、瞳が小さく息を吸う方が僅かに早かった。

「感動が分らないから泣きたいんじゃない」

――あと、少しだったのに。

瞳の顔は、今にも泣き出してしまいそうだった。

脚本制作が進まなくなって二週間が過ぎた。

「橋本、さ。何かあったのか？」

机に向かったまま微動だにしない栄一郎に新井が声を掛けた。

新井は部長たちを上手く折り合いを付けて作品傾向もコンセプトまとめ上げた。監督としての滑り出しは上々だった。一方、栄一郎は瞳のことが頭から離れなくて作業がまるで手に付かなくなっていた。

撮影開始までの期限は残り僅かだった。脚本が遅れては部員の士気も下がるし、自分を抜擢してくれた新井の期待を裏切ることになる。そうは分かっているのだが、気が進まないの

は自分ではどうにもならなかった。

栄一郎の感動は言葉に変換することが出来ない。対して瞳は感動を理論的に理解しようとしていた。最早言葉は互いの認識を仲介する媒体には成り得ないのである。だからこそ彼女は感覚のみで感動を理解する栄一郎自体を媒体に選んだ。だが、栄一郎はそれに気付けずに自分の定義まであやふやにしたらただだった。

新井は暗い顔の栄一郎を見て余程深刻な悩みだと思ひ込んだようで、がたがたと椅子を引き摺ってきて隣に座った。

「話して楽になるなら聞くからさ」

ありふれた言葉なのに妙に様になって聞こえるのは、栄一郎が彼を慕っているからこそなのだろう。

「新井さんは――。伝えたいことがあるのに、それを言葉に出来なかったらどうしますか？」話すべきか話さないべきか。一瞬逡巡して、このままでは埒が明かないと判断した栄一郎は、新井に悩みの種を打ち明けてみることにした。彼は元々、人の相談事を親身になって聞いてくれる質なのだ。

「言葉に……ねえ」

そう呟いたとき新井は黙りこくってしまった。だが、その表情は真剣そのものだった。栄一郎は新井に話を持ち掛けて良かったと思った。

新井はしばらくの間どこを見ているのか分らないような顔で黙っていたが、唐突に立ち上がるとちよつと待っている和本棚の何かを探し始めた。

新井は目当ての物が見付けると、それをずいっと栄一郎に突き付けた。

「橋本、これを見てみる」

少しだけ日に焼けた背表紙には二年前の日付が書き込まれていた。

「これって活動記録ですか？ そんなものあったんですね」

「ああ。今はやってないけど、その時は部員で回して書いてたんだ」

表紙には当時の映研部のメンバーの名前が書かれていた。新井の名前は一際字で書いてある。その下には、控え目に小さな字で瞳の名前が書いてあった。二年前ということは、瞳は当時四年生である。

「見てみるよ。なかなか面白いから」

栄一郎は促されるままにページを捲った。

「これ……写真ばかりですね」

開いたページはどこも写真が切り貼りされているだけで、記述らしきものは経費や連絡事項などの事務的なものばかりだった。

「ほら、瞳先輩」

新井が指差した写真には、炎天下で暑そうにレフ板を構える瞳が写っていた。

「みなさん暑そうですね」

栄一郎がそう言うと新井はその年は猛暑だったからなあとかからからと笑った。

「でも先輩は外の撮影はほとんど出てなかったぞ」

「え？　じゃあ何をしてたんですか？」

「ちよっと貸してくれ」

新井はファイルを受け取ると、ぱらぱらとページを捲って栄一郎に開いた所を見せた。

「瞳先輩は編集が専門だったんだ。主に音響の」

写真の中の瞳はパソコンの画面を食い入るように見詰めていた。栄一郎は瞳のこんな真剣そうな姿を初めて見た。

「俺さ、言葉で伝えられないことがあってもいいと思うんだ」

新井は珍しく静かな口調で口を開いた。

「確かに言葉って大切だし便利だけど、でもそれがなくなっちゃんと伝えられることもあるだろう？」

栄一郎はファイルに視線を落とす。部員全員が真摯に映画に向き合っている。それはどの写真からも見て取れた。みんな映画が好きでそこにいる。だから誰もが、瞳が、楽しそうに笑顔を浮かべている。

「言葉がなくても瞳さんに、伝わるでしょうか」

「ああ。きっと」

新井の肯定は力強く、そしてやはり頼もしかった。

「新井さん。僕、やってみたくことが出来たんですが――」

新井はにかつと歯を剥いて大きく頷いた。

学園祭まで、あと残り二カ月を切っていた。

学園祭の前日、栄一郎は映研部の部室で瞳を待っていた。

天候や部員個人のスケジュールに左右され難航していた撮影をなんとかこなし、つい昨日やっとの思いで編集を終えたばかりだった。栄一郎が書いた脚本はその日その日で内容が変わり、書き込みや折り込みだらけでぼろぼろになっていた。

無機質な廊下の奥から、かつかつという足音が徐々にその大きさを増しながら響いてくる。

「やあ。随分と久し振りね」

建て付けの悪い扉を慣れた様子で開けた瞳は、どうやら仕事帰りのようですーツを着ていた。栄一郎は瞳のスーツ姿を見るたびに、まるで大人の余裕が服を着て歩いているようにだ、と思うのだが、それは今日も例外ではなかった。瞳は三カ月前の別れ方を爪の先程も感じさせないくらい落ち着き払っていた。

「それで、用事って何なのかしら？」

「今日は瞳さんに映画を見てもらいたくてお呼びしたんです」

瞳は怪訝そうに眉を顰めた。

「映画って、まさかこの前言ってた学園祭用のやつのこと？」

「ええ。先輩としては是非公開前に見てもらいたくって」

栄一郎がそう言うのと、粋なことをするのね、と瞳は笑いながら椅子に座った。

カーテンを閉めて照明を落とすと夕暮れ時の室内は薄暗くなり、真っ白なスクリーンはぼんやりとオレンジ色に染まった。映写機の操作の仕方は、数時間前に教えてもらったばかりだった。

かたかたと音を立てながら映写機がスクリーンに映像を投射し始める。だが、上映開始のカウントダウンが終わっても流れるのは映像だけだった。

「これって、」

瞳が驚いたように目を見開く。

栄一郎たちが作ったのは無声映画だった。

ストーリーは有り触れたものでシンプルだが、その分メッセージ性が強い。役者の音声が無い代わりに効果音とBGMを重視した、まさに瞳の専門分野の映画だった。

栄一郎と瞳の間には感動の認識の差異という大きな齟齬があった。だから言葉が障壁となるのなら、それを取り払ってしまえば良かったのである。

瞳が感動が何か分からないと言うのなら、栄一郎は初めから自分の方法でそれを示せば良かったという、ただそれだけのことだったのだ。

瞳はスタッフロールが流れるスクリーンを見詰めていた目から一筋だけ涙を零した。それは何による涙なのかは分からない。だが、栄一郎がやるべきことははっきりとしていた。

「瞳さん。ハンカチ、どうぞ」

瞳は栄一郎の待ち構えていたと言わんばかりのタイミングに少し驚いたようだった。そしてはにかんだような顔で差し出したハンカチを受け取って目元を抑えた。

「映画に泣いたんじゃないわ」

そう言っ、瞳は顔を上げて唇に綺麗な弧を描いた。

「ふふ——ありがとう」

静かになった部屋に、映写機がテープを再生し終えたかしゃん、という小さな音が響いた。

帰り道で、栄一郎は久し振りに瞳の隣に並んで歩いた。

栄一郎の目線よりも少しだけ下にある瞳のสีขาวな顔はいつもより幾分も満足げで、目元と鼻先だけがほんのりと赤くなっていた。それをちらりと盗み見て、栄一郎は口元が緩むのを感じた。

「今度の休みなんだけどー」

瞳はかつんかつんと小気味の良いリズムで踵を鳴らしながら栄一郎の顔を覗き込んだ。

思わずだらしなく緩んだ口を引き結ぶ。にやにやしていたことがばれたら、彼女に何と言われるか。

身構えた栄一郎を見て、瞳は目を細めて小さく笑った。

「次は、君の好きな映画が見たいわ」

そう言って笑った瞳を見て、やはり自分は映画が好きだ、と思った。